

# 都医NEWS

Vol. 694

発行所 ■ 公益社団法人 東京都医師会 〒101-8328 千代田区神田駿河台2-5 TEL.03-3294-8821(代) 定価 ■ 1部77円

第62回十四大都市医師会連絡協議会	01
底流/地区医師会長連絡協議会報告 ほか	02
令和5年度 多摩地区医師会懇話会 ほか	03
都医-Fes ほか	04
みどりの広場 ほか	05
ふれあいポスト	06
感染症豆知識 ほか	07
地区医師会長からの一言	08



クリスマスの東京スカイツリー

## 第62回 十四大都市医師会連絡協議会



西川堺市医師会長の挨拶

### これからの医師会のあり方、医療の提供体制を協議

11月11日(土)・12日(日)に標記協議会が開催された。主務は堺市医師会で、コロナ禍もあり対面による開催は4年ぶりであった。初日は14時から全体会議が開催され、引き続き3つの分科会が開催された。

#### 第1分科会

##### 超少子高齢社会におけるこれからの医師会のあり方

3つのセッションが行われた。第1セッション「会員数を増やすための各医師会の取り組みについて」、第2セッション「会員数を増やすために解決しなければならないさまざまな課題」、第3セッション「堺の歴史とものづくり」

#### 第2分科会

##### 医療DX時代におけるセキュリティ対策について

2つのセッションが行われた。第1セッションでは、①セキュリティ対策の実施状況②ICT連携について③オンライン資格確認等について④堺市医師会より報告・全体の質疑応答があった。第2セッションでは、「医療機関のサイバーセキュリティ対策に関する日本医師会の取り組み」日本医師会サイバーセキュリティ支援制度」と題して、日本医師会の黒瀬

「最近話題になっている医療提供体制の課題に対する貴医師会が医師・市民に対して発信している方向性」についてそれぞれ報告がなされ、最後に堺市の取り組みとまとめが発表された。東京都医師会は、医療情報共有の取り組みとしての「東京総合医療ネットワーク」、標準型電子カルテに向けた取り組みと病院からの逆紹介を円滑に進めるための「地区医師会地域医療連携相談窓口」の設置検討について報告した。

#### 第3分科会

##### 3年間のコロナパンデミックから学んだこれからの医療提供体制

2つのセッションが行われた。第1セッション「コロナパンデミックから学んだ医療好事例」では7つの医師会から、第2セッション「コロナパンデミックから学んだ関係機関との連携」では6つの医師会から発表があった。東京都医師会は、2040年に向けた東京都の在宅医療供給体制の充実に向けた具体的な取り組み内容と、在宅医療推進強化事業にかかる3年間の東京都の事業を紹介し、今後の新興感染症に備えた東京都医師会の使命として、検査体制

した。終了後には、中尾治義堺市医師会副会長による総括があった。

2日目は、松本吉郎日本医師会会長による「日本医師会の役割について」と堺市博物館学芸員の白神典之氏による「堺の歴史とものづくり」の特別講演があった。続いて全体会議があり、堺市医師会副会長3名により各分科会でのまとめが報告された。

閉会式では西川正治堺市医師会会長、次回主務地医師会として横浜医師会の戸塚武和会長より挨拶があり、中尾治義堺市医師会副会長の閉会挨拶をもって終了した。

なお、本協議会では、国民の健康を守り、地域医療を安定して提供するために、6つの事項を要望することを決議した。

#### 要望事項

- 一、国民生活を支える基盤となる国民皆保険制度を堅持するための社会保障費の財源を確保すること
- 一、国民が必要な医療を適切に受けられるよう医薬品の安定供給を確保すること
- 一、医療現場に混乱や負担を生じないよう医療DXは丁寧に進め、セキュリティ対策には十分な財源を確保し、医療機関を支援すること
- 一、物価高騰や医療従事者の給与引き上げ等に医療機関が対応できるよう、公定価格である診療報酬を引き上げること
- 一、地域に根差し活動している医師が連携によって、面となって地域住民のかかりつけ医として機能する制度をつくること、そして、そのかかりつけ医を国民が自ら選べるようにすること
- 一、地域医療体制の実情を踏まえ、地域医療が崩壊することのないよう、医師の働き方改革を進めること



# 底流

## ウェルビーイングに向けて

ウェルビーイングとは幸せに生きるという概念である。それを達成するには「人間関係の満足度」が重要といえる。

ウェルビーイングとは幸せに生きるという概念である。QOLの高い生活であっても、必ずしも幸福感には結びつかないという問題が生じた。そこで注目されたのがウェルビーイングという概念である。ウェルビーイングとは幸福感、幸福度を示し、本人自身が主観的に幸福を感じて生きられるかどうかということである。

関係」が大きなカギになるといわれている。米国のハーバード大学医学大学院で行われた「成人発達研究」でも「人間関係」と「幸福感」の強い結びつきが示されている。我が国においても東北大学病院が「ウェルビーイング宣言」を提唱し、患者・家族だけでなく、医療従事者のウェルビーイングについても言及している。今後、医療・介護の分野でも、多くの高齢者がウェルビーイングな生活を送れるようにするために、家族とのつながり、地域とのつながりを重要視し、「人間関係」と「幸福感」の関連性を再認識する必要があらることを強調したい。

(鳥居明)

# 地区医師会長連絡協議会報告

令和5年11月17日(金)

### ◎都医からの伝達事項

(1) 糖尿病性腎症重症化予防プログラムの実施について  
協会けんぽ東京支部では、かかりつけ医と連携した保健指導「糖尿病性腎症重症化

(2) 主治医意見書記載の対価について  
東京都・特別区・市町村及び本会の4者間で、令和6年度8年度の主治医意見書記載の対価に関する協議を開催する。協議に際し地区医師会のご意見を伺いたく、アンケート調査の実施についてご協力をお願いした。

(3) 地域医療推進委員会・TMA医療会議合同「特別講演会」の開催について  
本年11月28日(火)に日本福祉大学名誉教授の二木立氏を招き、かかりつけ医機能等についての講演会を開催する

(4) 東京都在宅医療推進強化事業(24時間診療体制推進)交付決定状況について  
本年度の標記事業は、申請した26地区医師会すべてに対し交付が決定した。事業開始にあたり、担当理事連絡会を12月7日(木)午後7時からWEB開催する

(5) 東京都地域医療構想調整会議「在宅療養ワーキンググループ」参加者の推薦について  
本年度の在宅療養ワーキンググループを、12月から構想区域(二次保健医療圏)ごとに開催するのでご協力をお願いした。

(6) 医療及び介護の体制整備に係る協議の場の開催及び参加者の推薦について  
第8次医療計画及び第9期介護保険事業(支援)計画の策定に伴い、協議の場を在宅療養ワーキンググループと同日に開催するのでご協力をお願いした。

(7) 都内医療機関に対する医療措置協定に関する東京都の対応について  
本年6月の地区医師会長連絡協議会で案内した、感染症法の基づく「医療措置協定」の調査に続き、今般、東京都から各医療機関(診療所)に対し直接、協定締結について依頼がある。本協定に関する疑問点やご意見等をお願いしたい旨報告した。

(8) 「東京都医療機関物価高騰緊急対策支援金」の継続及び拡充に関する要望書について(練馬区医師会からの要望書に対する回答について)  
本年9月の地区医師会長連絡協議会で提出された要望書について、都内全体にかかわることとして、本会から東京都に対して要望し回答を得た。回答は10月20日付で通知したことを報告した。

予防プログラム」を実施する。プログラム開始にあたり、会員周知のご協力をお願いした。

その後も、1948年にWHOが提唱した健康の概念だが、近年の研究では「人間関係」が大きなカギになるといわれている。

本年度の在宅療養ワーキンググループを、12月から構想区域(二次保健医療圏)ごとに開催するのでご協力をお願いした。

第8次医療計画及び第9期介護保険事業(支援)計画の策定に伴い、協議の場を在宅療養ワーキンググループと同日に開催するのでご協力をお願いした。

本年9月の地区医師会長連絡協議会で提出された要望書について、都内全体にかかわることとして、本会から東京都に対して要望し回答を得た。回答は10月20日付で通知したことを報告した。



会場の様子

## 令和5年度

## 城北地区医師協議会

11月2日(木)、都内のホテルで城北地区医師協議会が開かれた。

土屋淳郎豊島区医師会長の開会挨拶に続き、来賓として尾崎治夫東京都医師会長が挨拶を述べ、同席の副会長と理事を紹介した。

次に各地区医師会より、内田寛稔馬区医師会長、松田健北區医師会副会長、齋藤英治板橋区医師会会長の挨拶があった。

議題としては、(1)「オンライン資格確認の問題点(練馬区医師会)」、(2)「多職種

協働推進のための取り組み(板橋区医師会)、(3)「インボイス制度への北區医師会の取り組み(北區医師会)」、(4)「乳幼児健診の出勤に関して(豊島区医師会)」があった。それぞれの発表に対して、東京都医師会(7名)、各区医師会(練馬区医師会12名、板橋区医師会9名、北區医師会5名、豊島区医師会12名)、計45名の出席者から議題内容の関連役職などの専門家が、全体あるいは細かい現状や取り組みに係る説明、補填などを発言し、今後も引き続き検討していくこととされた。

最後に、北堀和男豊島区医師会副会長が閉会挨拶をして会を終えた。

## 都医ニュース表紙の写真を募集

本ニュースは毎月、季節に合った東京の写真を表紙に掲載しております。その表紙写真に、先生が撮影した写真を応募してみませんか? 都内の写真で、季節感のあるものをお願いします。本会広報委員会でご掲載を決定いたします。なお、掲載された写真は、本会のホームページにも掲載させていただきます。

応募規定  
デジタルカメラやスマートフォンで撮影した  
600万画素以上(横3000×縦2000ピクセル以上)のデジタルデータ  
プリントサイズは、横235mm×縦137.5mm以上

### 応募・問い合わせ先

〒101-8328 東京都千代田区神田駿河台 2-5  
東京都医師会 広報学術課 ☎03-3294-8821 (代)  
kouhou@tokyo.med.or.jp

◎地区医師会からの報告  
(1) 中央ブロック  
①中央区脳卒中医療連携協議会区民公開講座について  
(文京区医師会)

(2) 城西ブロック  
①第15回玉川医療フォーラムについて  
(玉川医師会)

(3) 城南ブロック  
①第27回北区医師会医学会について  
(北区医師会)  
②第19回区民健康公開講座について  
(北区医師会)

◎出席者による意見交換  
(立川市医師会)



# 令和5年度 多摩地区医師会懇話会



「安藤高夫とザ・ハイチーズ(ザ・配置医ズ)」

11月4日(土)に都内ホテルにて、多くの先生が待ち焦がれたタマコニー多摩地区医師会懇話会が開催された。桐朋学園の卒業生によるクラシックの生演奏を調布市医師会の江木七海理事が紹介し、司会には多摩地区に40年暮らすアナウンサーの三宅民夫氏を迎え、絢爛に執り行われた。西田伸一調布市医師会会長から、「大変な中でも慎重に運べたコロナ診療ではあったが、連携や情報共有に関しては地域差が大きかった。これは、病院叩きから始まった異例の進行を見た財政審議会の在り方に怒り心頭に発したものの、穏やかに学生時代に多摩地区で過ごした懐かしい思い出を語った。尾崎治夫東京都医師会会長は、「東京都の医療は区部と多摩地域で事情も異なる課題も多いが、日医と協力して今後の医療を考えた。また、財務省の今回の会議の進め方は残念であり、医師会は一一般企業が参入することも出

も実情に合った医療が重要であり、ますますの一致団結を」と開会の辞が述べられた。小池百合子東京都知事からは、新型コロナウイルスに関する医療に対する医師会の貢献に謝辞が送られ、課題山積の今後の医療に關して更なる協力の要請をもち、来賓挨拶がなされた。続いて松本吉郎日本医師会会長は、病院叩きから始まった異例の進行を見た財政審議会の在り方に怒り心頭に発したものの、穏やかに学生時代に多摩地区で過ごした懐かしい思い出を語った。尾崎治夫東京都医師会会長は、「東京都の医療は区部と多摩地域で事情も異なる課題も多いが、日医と協力して今後の医療を考えた。また、財務省の今回の会議の進め方は残念であり、医師会は一一般企業が参入することも出



西田調布市医師会会長

来ない薄利で行政に協力していることを理解せず、忸怩たる思いもあり、また落胆も禁じ得ない」と熱く語った。長友貴樹調布市長は、26市全ての医師会に対し「今回の災害医療とも言える感染症対策に指導貢献をいただき感謝に堪えない」と述べた。乾杯の挨拶は、田原なるみ東京都多摩府中保健所長が行い、「今回の感染症対策では保健所も助けられたが、地域住民の安心は非常に大きかった」と語った。自見はなこ内閣府特命担当大臣はじめ羽生田たかし参議院議員、伊藤達也衆議院議員から来賓挨拶があった。宴終盤には平川博之東京都医師会副会長がドラムを担当するバンド「ザ・ハイチーズ(ザ・配置医ズ)」が登場し、松本尾崎両会長もボーカルに加わり大いに盛り上がった。次期当番である西東京市医師会の三輪隆子会長による挨拶に続き、調布市医師会の風裕治副会長の江戸三本締めで幕を引いた。

# 東京都医師会 定例記者会見

東京都医師会は、11月14日(火)に定例記者会見を開催した。

尾崎治夫会長は、現在の感染症の流行状況を踏まえ、新型コロナウイルス感染症とインフルエンザのワクチン接種の必要性を訴え、引き続き可能な限り多くの人に、特に重症化リスクの高い高齢者・基礎疾患のある方には「XBB.1.5対応の1価ワクチンの接種をしてほしい」と呼びかけた。新型コロナウイルスの経口薬についても低負担で使えるよう東京都と交渉中であると説明した。

また、財務省が11月1日の財政制度等審議会財政制度分科会に提出した資料で診療所の初診・再診料引下げ等を主張したことについて、「なんとこの国は悲しい国なんだろう」と心情を語った。現在新たな感染症の発生及びまん延に備えるため、都道府県と医療機関が「医療措置協定」を締結することが求められ、東京都医師会と東京都で議論を進めている最中である。これについて尾崎会長は「都民を守るために必要な協力はしていきたい」「出来る限り要望に応えたいと考えていた」と述べ、最中の衝撃的な出来事に不信感をあらわにした。会員や働いているスタッフの想いをとりまとめ代弁し、最後は山本五十六の格言「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば人は動かじ」と締めくくった。

最後に、川上一恵理事は最近の感染症流行状況について報告し、主に梅毒の報告数の増加を指摘した。大人に限らず、母子感染により罹患して生まれながらに先天梅毒を抱えて生きることを強いられる赤ちゃんがいること、先天梅毒の予防には妊娠する前の検査が必須であることに反してそのためのシステムが現在はないことへの危惧を示し、予防が年代性別問わず重要であると呼びかけた。



また、財務省が11月1日の財政制度等審議会財政制度分科会に提出した資料で診療所の初診・再診料引下げ等を主張したことについて、「なんとこの国は悲しい国なんだろう」と心情を語った。現在新たな感染症の発生及びまん延に備えるため、都道府県と医療機関が「医療措置協定」を締結することが求められ、東京都医師会と東京都で議論を進めている最中である。これについて尾崎会長は「都民を守るために必要な協力はしていきたい」「出来る限り要望に応えたいと考えていた」と述べ、最中の衝撃的な出来事に不信感をあらわにした。会員や働いているスタッフの想いをとりまとめ代弁し、最後は山本五十六の格言「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば人は動かじ」と締めくくった。

## 東京消防庁救急相談センター

2023年度から石原哲先生の後任として#7119医長に就任した医療法人伯鳳会東京曳舟病院副院長の三浦邦久です。会員の皆様どうぞよろしくお願いいたします。昨年度までは、副医長として救急相談センター看護師の採用試験官や実務評価を行ってまいりました。副医長から行っていた#7119出務手配は続投しておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。現在インフルエンザや新型コロナウイルス感染症に罹患し、#7119の出務が出来ない場合や自分を含めて働き方改革の影響で以前のように#7119出務が出来ない方がおり、#7119出務が難航する時がありますが、幸いにして皆様のお力のお陰で#7119は絶えず医師が常駐しております。

2023年度から通信員は多摩のみとなりました。また、本庁に現在メディカル・コンシェルジュからの派遣看護師と従来からの東京消防庁採用の看護師が混在して#7119に出務しております。

#7119の課題の1つとして、取り切れない電話(トラフィック)があります。このトラフィックをいかに減らせるか、まずは救急相談看護師を増員して電話対応をしております。

会員の皆様で#7119出務に興味がある方はぜひ、地区医師会または東京都医師会救急・災害課までご連絡いただければ幸いです。

## 東京消防庁救急相談センター受付状況 (速報値)

[令和5年1月1日から9月30日まで]

	累計	前年件数	前年同時期増減(増減比)	受付件数に占める割合	前年同時期	1日あたりの件数
総着信件数	433,229	363,239	69,990( 19.3%)			1,586.9
受付件数	347,497	327,489	20,008( 6.1%)			1,272.9
救急相談	223,192	194,903	28,289( 14.5%)	64.2%	59.5%	817.6
救急要請	39,737	31,239	8,498( 27.2%)	(※1)17.8%	(※1)16.0%	145.6
医療機関案内	122,753	131,345	-8,592( -6.5%)	35.3%	40.1%	449.6
相談前救急要請	1,202	584	618(105.8%)	0.3%	0.2%	4.4
かけ直し依頼	350	657	-307( -46.7%)	0.1%	0.2%	1.3
その他(苦情)	0	0	0( 0.0%)	0.0%	0.0%	0.0
応答率(※2)	80.2%	90.2%	-9.9%			
看護師への医師助言	22,663	24,123	-1,460( -6.1%)			83.0
通信員への医師助言	2,493	9,912	-7,419(-74.8%)			9.1

(※1)救急相談件数に占める割合  
(※2)応答率とは、総着信件数に占める受付件数の割合(応答率=受付件数÷総着信件数(%))



\*尾崎会長の「資料1-2」全文および記者会見の全容は東京都医師会ホームページ(右記)よりご覧いただけます。



# 都医-Fes

## 都民と一緒に目指すウェルビーイング！

11月5日(日)に都医-Fesが開催された。司会者からの開催の挨拶で始まり、「ウェルビーイング」は翻訳すると「幸福」、そして、W

夫東京都医師会長より挨拶があり、東京都医師会が都民の方々により親しんでもらうために「都医-Fes」と命名したことを含めて、今回の概要が紹介された。

トークセッションエリアでは、都医Q&Aセッションが計5回にわたり行われた。セッション①「生活習慣病って何？」では、水野重樹東京都医師会副会長がそれぞれ登壇し、⑤「救急って何？」は

11月18日(土)杏林大学・三鷹市医師会の協力のもと、杏林大学三鷹キャンパスにおいて「医学生、研修医等をサポートするための会」近未来の東京の医療を考えたよう」が開催された。当日はハイブリッド形式で行われ、会場は満席であった。本講演会は日本医師会と東京都医師会の共催事業であり、男女共同参画の視点からさまざまなモデル像を示し、情報提供・意見交換の場を設け、若手医師が今後のキャリアや働き方を具体的に考える一助となることを目的としている。

今年度も東京都医師会の市川菊乃理事による司会で進行了。尾崎治夫東京都医師会長からは開会の挨拶に続き、「近未来の東京の医療に希望はあるのか？」というテーマで基調講演があった。この中で尾崎会長は、高齢化は進むが人口は減らないという人口動態が生む、東京独自の医療の問題に立ち向かうには、開業医と地域の病院がしっかりと連携と役割分担を行い、365日24時間を面で支えるかかりつけ医療能というものを構築していく必要があると語った。また、後半はこれからのパンデミックに備える視点から、臨時医療施設やシミュレーションセンターについて提案があった。会場ではメモを取り熱心に参加する姿が目立った。最後に、「決して逃



水野理事



トークライブセッションの様子

どもにも人気の救急車体験エリア。(4)大豆ミートを提供するキッチンカーエリアである。開催中はそれぞれが常に活動しており、各エリアには常時参加者の姿があった。救急車体験エリアには約350名が来場した。



都医サイズ

最後は、東京都医師会の尾崎会長・荏司輝昭理事と大橋末歩氏によるトークライブセッションで、書籍『近未来のTOKYO医療に希望はあるか?』の概要やTMA近未来医療会議で協議している内容の説明があった。荏司理事は日本の医療を海外と比較しながら説明し、国民皆保険を守る意味でも適切な受診をしてほしいと呼びかけた。

「近未来の東京の医療に希望はあるのか?」というテーマで基調講演があった。この中で尾崎会長は、高齢化は進むが人口は減らないという人口動態が生む、東京独自の医療の問題に立ち向かうには、開業医と地域の病院がしっかりと連携と役割分担を行い、365日24時間を面で支えるかかりつけ医療能というものを構築していく必要があると語った。また、後半はこれからのパンデミックに備える視点から、臨時医療施設やシミュレーションセンターについて提案があった。会場ではメモを取り熱心に参加する姿が目立った。最後に、「決して逃



萬教授、尾崎会長

次に、杏林大学医学部産婦人科学教室の谷垣伸治教授より「少子化で産科医はいらなくなるか」をテーマに講演があった。カードを使った参加型講義スタイルで活気ある空間に会場が引き込まれた。我が国の課題と産婦人科医療について、また、産婦人科医の多岐にわたる仕事内容に関する概説があり、「産婦人科とは卵子から次の世代まで女性と伴走する学問である」と



須並教授、谷垣教授

「都医サイズ」と銘打って、インスタクターのSAORI氏とともに、客席も一体となってエクササイズが実演された。セッション③「小児科医の仕事とは?」には小児科医の川上二恵東京都医師会理事が、④「うつ」って何?」には精神科医の平川博之東京都医師会副会長がそれぞれ登壇し、⑤「救急って何?」は東京大学医学部救急学専攻長である新井悟理理事・小平祐造理事によりクイズ形式も取り入れられて行われた。その後は、「お笑いライブ+AED紹介」で小島よしお氏と一緒に、AED紹介を含めて、東京防災救急協会の協力のもとAED体験を行った。会場は笑い声に溢れ、楽しく学べるセッションであった。

最後は、東京都医師会の尾崎会長・荏司輝昭理事と大橋末歩氏によるトークライブセッションで、書籍『近未来のTOKYO医療に希望はあるか?』の概要やTMA近未来医療会議で協議している内容の説明があった。荏司理事は日本の医療を海外と比較しながら説明し、国民皆保険を守る意味でも適切な受診をしてほしいと呼びかけた。

今年度も東京都医師会の市川菊乃理事による司会で進行了。尾崎治夫東京都医師会長からは開会の挨拶に続き、「近未来の東京の医療に希望はあるのか?」というテーマで基調講演があった。この中で尾崎会長は、高齢化は進むが人口は減らないという人口動態が生む、東京独自の医療の問題に立ち向かうには、開業医と地域の病院がしっかりと連携と役割分担を行い、365日24時間を面で支えるかかりつけ医療能というものを構築していく必要があると語った。また、後半はこれからのパンデミックに備える視点から、臨時医療施設やシミュレーションセンターについて提案があった。会場ではメモを取り熱心に参加する姿が目立った。最後に、「決して逃

「+αがあること」、「コミュニケーション能力が大切であること」が挙げられ、コミュニケーション能力というのは教科書には載っていない、自分の体験で身につけていくものであるという話が印象的であった。



学生や研修医から活発な質疑が続いた

最後に杏林大学医学部消化器・一般外科学教室の須並英二教授より「外科医の未来は明るいのか?早くなるとかしない」とについて講演があった。医師の総数が増えている一方で外科医の数は減っていない。特に若手医師が減ってきており、外科医の高齢化が進むことが懸念される。加えて、長時間労働、ライフワークバランスの悪さなども指摘されており対策が急務であると述べた。

その後のパネルディスカッションでは杏林大学医学部付属病院総合研修センターの福田泰彦教授を座長に活発な意見交換が交わされ、会場は熱気に包まれた。結びに杏林学園の松田剛明理事長より閉会の挨拶があり、これからの時代を担っていく医学生、研修医等へ向けて、医師は天職であると熱く締めくくられた。

### 令和5年度

## 「医学生、研修医等をサポートするための会」

という言葉が印象に残った。

最後に杏林大学医学部消化器・一般外科学教室の須並英二教授より「外科医の未来は明るいのか?早くなるとかしない」とについて講演があった。医師の総数が増えている一方で外科医の数は減っていない。特に若手医師が減ってきており、外科医の高齢化が進むことが懸念される。加えて、長時間労働、ライフワークバランスの悪さなども指摘されており対策が急務であると述べた。



# 189 みどりの広場

## 医療連携と救急医療に 取り組んでゆく 豊島病院

地方独立行政法人東京都立病院機構  
東京都立豊島病院 院長

安藤昌之



COVID-19の2023年は突然増加したオミクロン株感染者を引き受け、2022年1月には、都内のCOVID-19入院患者の1割強の診療を行ったのです。また、2022年の年末から2023年の年始には、コロナ・インフルエンザの同時流行が危惧されました。そこで、特設のプレハブ発熱外来を設置して一日約100名の発熱患者の対応をしました。結果的には同時流行は発生しませんでした。これからの冬はどうな

の力が東京都の医療を支えたと思っています。私たちがそのメンバーでした。これから、東京都の医療機関は適切にその役割を果たし、都市を守ってゆかなくてはならないでしょう。COVID-19は、まだ気を付けなくてはならない感染症です。感染力は低下してはいるため、ワクチン接種もすすめてゆかなくてはなりません。

都からCOVID-19の重点病院に指定された当院・都立広尾病院・都立荏原病院では、2022年の年間入院診療患者のうち40〜50%はCOVID-19患者でした。この3病院だけでなく医療体制の多くをCOVID-19対応に割かざるを得なかった施設では、誰しもが予想し得ない影

響を現在も残していると思います。職場の人間関係や仲間意識が変化し、職員の離職も少なからず発生しました。私たち職業人の生活の多くの部分を占める場所である病院が、どのような方舟になっているのか。COVID-19で傷んだ職場環境を良いものにしてゆきたい。新人の歓迎や時宜を得た職場集会など、人の出会いの場は職場の人間関係にこんなに必要であるとは

今まで思ってもいませんでした。そして、今こそもう一度、自身の病院の特徴を確認して、診療を発展させてゆきたいと考えています。

当院は板橋区にあり、日本大学医学部附属板橋病院、帝京大学医学部附属病院、東京都健康長寿医療センターなど診療規模の大きな病院に囲まれた立地であります。しかし、大きな施設では行にくい医療連携、感染症管理に慣れない施設では受け入れにくい救急診療を当院で進めてゆくことで、地域での役割を果たしています。また、診療の隙間を埋める精神科、緩和ケア科のリエゾンチームと患者・地域サポートセンターは当院の誇りの特徴です。

①地域連携に関して  
当院はCOVID-19診療下でも、地域医療の充実のためにオンライン予約システムカルナ(C@RNA)を活用して、連携診療所から直接当院外来と同じように容易に検査や外来が予約できる仕組みを広めています。また、土曜日の検査体制は、CT、M

R1、Echo、内視鏡まで拡大しました。

②救急診療に関して  
現在、年間5000例程度のペースで救急車を受け入れています。業務効率化のためにERエイドを導入。そして今後、救急救命士の導入を行います。

③リエゾン診療  
がんの痛みには緩和ケア科リエゾン体制が、認知症や精神科リエゾンが正しく対応してくれそうです。外来と入院を結び、病気と社会生活の不都合を調整援助する患者・地域サポートセンターの活躍。これらは、社会弱者や複雑な病状の診療に、多職種連携をもって多く貢献しています。

各診療科の疾患に対する治療技術設備整備に関しては、この3年の間にいくつかの進歩がありました。

①循環器内科の不整脈治療心筋焼却術(年間100例)  
②外科(結腸直腸癌、泌尿器科(前立腺)による手術支援ロボット「ダヴィンチ」の導入

③緩和ケア病棟の充実  
④日曜日も行いうりハビリテーシヨン  
⑤産科の和痛分娩の推進(年間140例)、妊婦食メニューの改善  
⑥放射線治療ではIMRTだけでなく、緩和照射にも

住宅地に突然森が現れ「圃」としてスタートしたのが「林試の森公園」です。明治33年に当時の農商務省林野整理局が「黒試験苗

圃」としてスタートしたのが始まりで、その後、林野庁の付属となり「林業試験場」に名称を変更しました。これが林試の森の由来です。平成元年6月1日に都立林試の森公園として生まれ変わりました。

林業試験場だっただけあって背が高い木が多く、広々とした空間が緑に囲まれ、ビルや住宅のない景色が広がり、都会の騒音から解放され鳥や虫の鳴き声、せせらぎを聞きながら本を読んだり、散歩したりしながら自然を感じる心地よい時間を過ごせます。春はソ

メイシノや河津桜。初夏のアジサイ、秋のキンモクセイといった植物を見て季節を感じることもできます。季節によってカモなどの野鳥も飛来します。この公園は東西に700m、南北に250mと細長く、外周を一周すると45分程度です。お子さんたちのアクティビティも充実しており、ターザンロープをはじめとした遊具や、夏はじゃぶじゃぶ池もあります。東急目黒線不動前駅もしくは武蔵小山駅から、それぞれ15分程度。皆さんも都会の森林浴をいかがでしょうか?

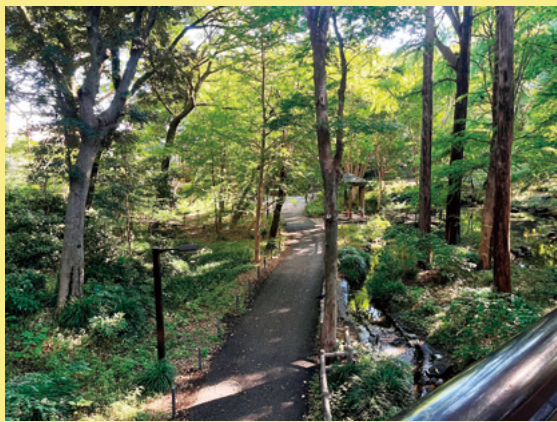
品川区医師会・三浦和裕

注力  
1899年7月に避病院として診療開始した当院として、新しい見地から先進的で地域医療を確実に進めてゆく医師会員の皆様の仲間として、これからもよろしく御指導ください。

【お問い合わせ先】東京都医師会・広報学術課  
03-3294-8821

自薦・他薦OK 募集中!  
各地区医師会におかれまして、会員が出版された本がございましたら、この掲示板のコーナーで紹介してみませんか。  
都医ニュースでは、本年も会員の先生方が出版されました本を募集いたします。この掲示板のコーナーは、主に会員の先生方が出版された本を中心に紹介していきます。

【お問い合せ先】東京都医師会・広報学術課  
03-3294-8821



都会の散歩道

### 林試の森公園 都会で楽しむ森林浴

#### 趣味の散歩

す。平成元年6月1日に都立林試の森公園として生まれ変わりました。林業試験場だっただけあって背が高い木が多く、広々とした空間が緑に囲まれ、ビルや住宅のない景色が広がり、都会の騒音から解放され鳥や虫の鳴き声、せせらぎを聞きながら本を読んだり、散歩したりしながら自然を感じる心地よい時間を過ごせます。春はソ



#### 趣味の散歩

す。平成元年6月1日に都立林試の森公園として生まれ変わりました。林業試験場だっただけあって背が高い木が多く、広々とした空間が緑に囲まれ、ビルや住宅のない景色が広がり、都会の騒音から解放され鳥や虫の鳴き声、せせらぎを聞きながら本を読んだり、散歩したりしながら自然を感じる心地よい時間を過ごせます。春はソ

品川区医師会・三浦和裕

注力  
1899年7月に避病院として診療開始した当院として、新しい見地から先進的で地域医療を確実に進めてゆく医師会員の皆様の仲間として、これからもよろしく御指導ください。

【お問い合わせ先】東京都医師会・広報学術課  
03-3294-8821

自薦・他薦OK 募集中!  
各地区医師会におかれまして、会員が出版された本がございましたら、この掲示板のコーナーで紹介してみませんか。  
都医ニュースでは、本年も会員の先生方が出版されました本を募集いたします。この掲示板のコーナーは、主に会員の先生方が出版された本を中心に紹介していきます。

【お問い合せ先】東京都医師会・広報学術課  
03-3294-8821

## 掲示板

医師会員先生方  
ご著書をご紹介ください



## 知っていますか?

### 東京都在宅医療推進強化事業

「在宅医療推進に向けた都の取組」の中の新規事業。コロナ禍での在宅療養患者等への取組を踏まえ、「24時間診療体制推進事業」「デジタル技術を活用した医療DX推進事業」についての地区医師会の新たな取組に対し、都から補助が行われる。3年間の都の事業を経た後は、区市町村に引き継がれることが想定される。



町田市医師会

讃岐邦太郎

## 私が手元に置いておきたい大事な一冊

私も医師として働き始め22年が過ぎました。そして町田で開業して10年が経とうとしています。毎日の忙しい外来診療や在宅診療を行う過程で、診断や治療方法にふと迷いを生じることが時々あります。また、同じような症状や訴えの患者さんを診ていく中で、自分なりの鑑別診断や処方ルールができあがっていることに気づかされます。受診理由は様々であるため、患者さんと過ごす短い診療時間の中で、表情や言葉の強弱、仕草から何を求めているのか判断していく必要があります。

私が開業を決め、先輩医師に相談に行ったときにプレゼントされた本があります。「ドクターズルール425 医師の心得集」です。有名な本なので、ご存じの先生も多いと思います。原作はCLIFTON K. MEADOR, M.D. 編「A LITTLE BOOK OF DOCTORS' RULES」で「ハリソン内科学」など、有名医学書籍を翻訳し京都大学名誉教授元聖路加国際病院院長をされていた福井次矢先生が翻訳されています。

最近では社会人のリスキリング：Reskilling「技術革新やビジネスモデルの変化に対応するために、業務上で必要とされる新しい知識やスキルを学ぶこと」を経



済産業省が中心となって国が推奨しています。毎日の忙しい診療中での気づきを規則集としてまとめた、「ドクターズルール425」は、今後の医師生活の中でのリスキリングのきっかけとなるのではないのでしょうか。

〈訳者の序文：抜粋〉-----

われわれ医師の日々の行為の本質は、数え切れないほど多くの診断や治療に関する臨床的決断を下すことにある。ところが、ほとんどの場合、臨床的決断はその背景にある一つひとつの医学的事実を直立的に理詰めで検討して下されるものではなく、いわゆる発見的方法に則って一瞬のうちに下されている。つまり、知識としての膨大な医学知識は必ずしも臨床決断の都度引き出されるのではなく、そのような知識に基づいて、大雑把ではあるが短時間で、知的エネルギーを浪費しなくても蓋然性の高い決断に到達できる認知プロセスがわれわれには備わっているのである。そのような発見的方法に則った行動指針を簡潔で印象深い文章で表したものが格言であり規則と呼ばれるものであろう。

-----  
ドクターズルール425の中から、私の心に響き、「そうだよね」と思えた文章をいくつか紹介します。本文には日本語訳に加えて、英語の原文も記載されており、英語原文からしか感じられない、独特の言い回しを読むことができます。ぜひ原著を含め一読されることをお勧めいたします。

## 「ドクターズルール425」より

- # 28 あなたが主治医になれる患者となれない患者を見分けられるようになること。主治医になれる患者は他の医師に紹介すること。その場合は、できるだけ早い方がよい。
- # 46 あなたが診ようが診まいが、ほとんどの外来患者の病気は治るものである。
- # 98 疾病の中には治療のできないものもあるが、ケアをすることはすべての患者についてできる。
- # 106 考える時間が必要なときには、高齢患者に便通について尋ねるとよい。
- # 133 初診患者には、少なくとも5分間は自由に喋らせること。多くのことが分かるはずである。
- # 148 いかに厳しい状況に置かれていても、患者に笑みを忘れさせないように努めること。
- # 156 重症または末期患者では、遠方からくる親戚の者に気を付けなさい。彼らはしばしばトラブルの元となる。
- # 169 まれな病気が頻度の高い症状を呈するよりも、頻度の高い病気がまれな症状を呈することの方が多。
- # 171 薬の投与を開始した後で出てきた新たな症状は、その他の原因が明らかにならない限り、その薬によるものとする。
- # 195 診療経験が10年以上になるまで、「わたしの経験では」と言うてはならない。たとえ診療経験が10年以上であっても、この言葉は使わないにこしたことはない。
- # 291 医師が自分自身を治療することはおろかな患者になることであり、それにもましておろかな医師になることである。
- # 314 患者は最も重要なことを、医師が病室を出る直前になって言うものである。
- # 328 人生にはバランスが必要である。医学以外の趣味や興味を追究しなさい。
- # 330 患者を治療するにあたって、あなたの性格はあらゆる薬や治療法と同じくらい重要である。

# 無声拝聴

## 師走に感じる時の流れ

子どものころ12月になると師走といわれて、親たちが慌てたのを不思議に思っていた。ところが、季節を幾度も過ぎて年を重ねると、師走のソワソワを感じるようになっていった。この近頃は、年の瀬に限らず、なんだか常に時間が早く進むような気持ちになっている。1秒という時間は平等に刻まれるはずなのに、この1時間がやたら早く感じたり、また長く感じたりと、過ぎ行く時間への感覚は微妙なものである。おや、それは時間の観念が微妙になってきて認知症の始まりであろうか。

さて、2019年に働き方改革が導入され、我々医師は例外として猶予され5年の時間を与えられたが、その猶予期間も早過ぎて、いよいよ2024年4月の働き方改革の時に差し迫ってきている。この5年間の医師の準備はものすごく短時間で進んだように感じる。大学医局問題、医師の過労死問題なども孕んだ医師の働き方改革は、猶予期間をあっという間に過ぎて、もう目前である。小職の属する市中の病院、大病院はもちろんで、すべての医療機関に影響を及ぼすこの働き方改革はどの方向へ進んでいくのであろうか。心配な面持ちでその行く先を見守ってまいりたい。

(菊池嘉)

## HPVワクチンの接種率を上げる工夫

HPVワクチン(HPV)は、2013年6月の「積極的な接種勧奨の一時差し控え」から約9年を経て、2022年4月に自治体から接種対象者に予診票などを送る積極的勧奨が再開された。差し控え期間中に接種機会を逃した女性(1997年4月2日~2007年4月1日生まれ)にも2025年3月末までの時限措置で「キャッチアップ接種」が行われ、少しずつ接種者は増えてはいるが、有効性や安全性についてのエビデンスが蓄積され副反応に関する情報提供ができるようになって、副反応疑いに関するかつての報道の影響で、いまだ不安を抱えている保護者や接種対象者も少なくない。いくら制度が整っても、正確な情報が届かなければ、接種率は上がらない。そこで、接種率を上げる工夫を以下に述べる。

- 1)自治体からの通知の徹底等：親元を離れて暮らすなど、他の自治体に住民票がある対象者でもスムーズに受けられるようにする(広域化)。
- 2)かかりつけ医からの声かけと診療科の垣根を超えた啓発：かかりつけ医は、対象者が受診した際に「HPVはもう済みましたか?」と声かけする。産婦人科、内科、小児科ばかりでなく、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、外科系診療科など、他の診療科からの情報発信も必要になる。各地区医師会の役割がとても重要である(医師からの発信、情報共有と連携)。
- 3)学校での啓発：中学校までは、ほぼすべての子どもたちが通学するので、性教育とがん教育双方からのアプローチが可能である(情報格差の解消)。
- 4)被接種者からの口コミ：友人が接種したと聞けば、自分も受けたほうが良いと思う(効率良い連鎖)。
- 5)薬局での情報提供：あらゆる年齢層が利用するので情報拡散しやすい(家庭内での情報共有)。

HPVは、原則初回接種から6カ月間に3回接種(9価の場合、15歳未満は2回接種)する。つまりキャッチアップ接種の対象者は、2024年9月末までに初回接種を開始しないと、3回すべてを無料で接種する機会を失いかねないことになるため注意が必要である。  
(文責：萩原温久)

感染症豆知識

東京都医師会 感染症予防検討委員会

## 都医からのお知らせ INFORMATION

### 第462回 国際治療談話会 例会 「治る瞬間を見るー超音波検査の素晴らしさー」

**問合先** (公財)日本国際医学協会 事務局 東京都世田谷区上馬 1-11-9-3F  
TEL: 03-5486-0601 FAX: 03-5486-0599  
E-mail: [imsj@imsj.or.jp](mailto:imsj@imsj.or.jp) URL: <https://www.imsj.or.jp/>

**日時**▶ 令和6年1月18日(木) 19時~21時 **形式**▶ WEB講演  
**開会挨拶**▶ 石橋健一(公財 日本国際医学協会 理事長)  
**座長**▶ 市橋 光(公財 日本国際医学協会 理事)  
**【第1部】**感想「国際情勢を客観的に分析する方法~国際関係論からのアプローチ~」天野修司(日本医療科学大学保健医療学部 准教授) **【第2部】**講演 I 「小児腸重積症の超音波下整備の実例」内田正志(地域医療機能推進機構 徳山中央病院 健康管理センター/小児科 健康管理センター長) / 講演 II 「治る瞬間を見るー超音波検査の素晴らしさー」橘田綾菜(東京女子医科大学八千代医療センター整形外科 助教)  
**視聴**▶ 無料  
**申込方法**▶ 右記2次元コードまたは当協会ホームページより Zoomウェビナーへ事前登録ください。  
**取得単位**▶ 日医生涯教育制度1単位(CC:15、54) 予定



## 医師国保からのお知らせ

### 医師国保では組合員の健康保持増進のためのさまざまな保健事業を行っています。

- 特定健診・特定保健指導の実施(従業員や家族の自家健診が可能です)
- 人間ドック受診結果(特定健診部分)のデータ提出への助成
- 乳房エコー検診費用の助成
- 脳血管健康診断(脳ドック)費用の助成
- 契約遊園・宿泊施設等の利用に際しての助成や優待

詳しい内容、申請方法等は当組合ホームページをご覧ください  
[www.tokyo-ishikokuho.or.jp](http://www.tokyo-ishikokuho.or.jp)

東京都医師国民健康保険組合 ☎ 03-3270-6431 (総務課)

### 都医 HP・E メール

- ホームページアドレス <https://www.tokyo.med.or.jp>
- Eメールアドレス [jimu@tokyo.med.or.jp](mailto:jimu@tokyo.med.or.jp)



## 地区医師会長からの一言

# 明治のコレラ、 令和のコロナと都立病院

都立病院医師会長 黒井克昌



感染症と闘い続ける都立病院。その原点はコレラの避病院にあります。コレラは元々ガンジス河流域の風土病でしたが、19世紀初頭に世界各地に広がり、現在は第7次パンデミックの只中にあります。日本では江戸末期に初めて流行し、明治に入っても1879年と1886年の大流行を含め数年ごとに流行を繰り返しました。対策として、検疫、避病院の設置、集会の禁止、生水・生ものの摂取の禁止、手洗い・換気の励行、消毒などが行われましたが、有効な治療法がなく多くの命を奪いました。現在は病原性の弱い株が流行し、ワクチンによる予防、補液・抗菌薬による治療が可能ですが、脅威は依然として残っています。

感染症の概念がなかった時代には、コレラは汚染された土壌や水から生じる悪い空気(瘴気)により引き起こされると考えられていました。1840年代にロンドンでコレラが流行したときは、瘴気対策として流行地域の下水をテムズ川に流して臭気を改善させましたが、下流域で感染者が増加しました。1854年の流行では、瘴気説に懐疑的だったスノウが詳細な調査と科学的分析を行い、特定の井戸の水が原因であると結論し、その使用を止めることで拡大を防ぎました。

近代的な細菌学は1861年にパスツールが自然発生説を否定し、1876年にコッホが病原菌の存在を証明したことで始まり、1928年に抗生物質ペニシリンが発見されています。ウイルスは1938年に初めて電子顕微鏡で可視化され、1974年に最初の治療薬アシクロビルが開発されています。一方、ジェンナーは1796年に種痘法を発明し、ゼンメルワイスは1847年に手洗いを義務付け、スノウは1854年に感染源・感染経路対策を実施し、リスターは1865年に消毒法を開発しています。す

なわち、人類の英知は、病原体が未発見で治療薬のない時代に、免疫で備え侵入を防ぐ方法を生み出しています。

その後、公衆衛生・医学・医療は大きく進歩しましたが、現代でも感染症の克服は容易ではなく、人類を脅かす新興・再興感染症が次々と現れています。今回の新型コロナウイルス感染症では、基本的な感染対策とテレワーク、デジタル化の推進、ゲノムテクノロジー、ワクチン・治療薬のスピード開発で対峙しましたが、何度も押し寄せる流行の波に翻弄され、インフォデミックがデマやヘイトクライム、感染者・医療従事者への誹謗中傷・差別をもたらしました。そうした中でバズったのがACジャパンのCM「寛容ラップ」です。相手をディスらないラップバトルで、たたくよりたたえ合おうと訴求し、面白い、シュールいやクール、今の時代に合うなどと話題を集めました。奇しくも東京都立病院機構発足と同じ日に放送が始まったことで強く印象に残っています。ちなみに、インフォデミック対策としてはリテラシーの向上、ファクトチェック、正しい情報の発出、意思決定支援とレジリエンス強化が有効で、感染対策でたたいてよいのは病原体のみです。

初めて新型コロナウイルスの感染者が報告されてから4年。これまで都立病院は医師会・行政機関と連携しながら求められる責務を果たしてきました。これからの医療は、ポストコロナ時代の幕開けの中で迫りつつある2040年問題に知恵と工夫で備える必要があります。都立病院は、皆様と一緒に近未来のTOKYO医療を支えていくために、相互補完的・相互互恵的連携を強化し、行政的医療や高度・専門的医療、地域に必要とされる医療をさらに充実させてまいります。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。